

『余地』

～相談業務を楽しむ方法 16～

<ハヤリコトバ>

杉江 太朗

～外国のコトバ～

ハンバートハンバートさんという男女2人組ユニットの「国語」という曲の歌詞を以下に引用する。

「みんながフツーに使っている、そのコトバの意味がわからない」「ねえ、イデオロギーって?」「ねえ、アイデンティティって?」「辞書をひいてみてもわからない」

「みんながフツーに使っている、そのコトバの意味がわからない」「ねえ、オーガナイズって?」「ねえ、コラボレーションって?」「うちの広辞苑には出ていない」と続き、

「外国のコトバをカタカナに」「わからないくせに使うなよ」「テメーの都合で使うなよ」

などの歌詞で締めくくられていく。

最近に発売されCDに同封されているDVDでは、上記の外国のコトバに、「ロックダウン」「オーバーシュート」「ソーシャルディスタンス」「ワーケーション」というコトバも追加されている。そこでも、「テメーの都合で使うなよ」「わからないことを曖昧に」「騙すときだけに使うなよ」と続くのだが、それを聞いて、やけにしっ

くりきたのは、私だけではないはずである。この1年で、上記の言葉以外に、クラスター、テレワーク、ブースター接種、ブレイクスルー感染など、なんとまあカタカナコトバが増えたことか。

別に、どこかの知事の過去の会見で、やたらと横文字を並べたり、造語を用いたりして、胡散臭く聞こえたと言いたいわけではない。

子ども家庭相談の界限でも、そうした言葉が乱発されており、流行り言葉として広がってしまう、そうすると全てがその言葉でまとめられてしまうということが少なくない。個別の物語が、相対化させられてしまう。今回はそのような、コトバを巡るあれこれについて考えたいと思う。

～この業界の流行り言葉～

「16歳の兄と一緒に遊んでいた小学生がジャングルジムから落ちて」というニュースが流れた。すぐに、「ヤングケアラー」という外国のコトバが使用され、「全国にはヤングケアラーが～人いる」「親が働かざるを得ず、介護や養育がヤングケアラーの負担となっている」などとコメ

ントされる。しまいには、ヤングケアラーの専門家と名乗るとこかの教授まで登場する始末である。正直、この界限では、兄姉が弟妹の面倒を見ているという家族は昔からあった。当然、その負担が過剰であったり、登校に影響が出たりした場合は、介入の対象となる場合もあったが、家族の人員上、そうしないと回らない場合もあるのである。ヤングケアラーという言葉自体が広がったのも最近のことである。その専門家と名乗ること自体、胡散臭くしか聞こえない。

かつては、「おしん」というドラマがあったし、火垂るの墓の兄も妹の面倒を見ざるを得なかった。その視点で言えば、鬼滅の刃の主人公もヤングケアラーである。その主人公を「ヤングケアラー」という言葉で説明してしまうと、その物語はそこで終わってしまう。面白味もなにもない。やはり、「ヤングケアラー」というコトバだけでは、家族の置かれた個別の状況(＝物語)を表すことは出来ず、その家族の意志や思いを想像することが出来なくなってしまう。

それ以外にも、この界限における、個別の物語を相対化させる可能性を秘めたコトバとして、「虐待」「発達障害」「愛着障害」「トラウマ」なども挙げられるかもしれない。

～物語を相対化させることの影響～

とは言っても、「虐待」という言葉を使

うことがいつでも悪いわけではない。統計上の言葉として使うことで、児童相談所の多忙さを表すことが出来るし、実際その数の増加に伴って、人員配置への影響もあるようである。行政機関に対して、児童相談所が虐待として取り扱っているかどうか、その後の扱いに影響を与えることもあるようである。

しかし、「虐待」というコトバで、全ての内容を表せるかと言えばそうではない。援助職同士でも、この子どもは虐待を受けてきたから・・・などと自然と使われてしまうが、子どもの置かれた状況を「虐待」というコトバだけで表現してしまうことは陳腐である。虐待を受けてきたから何なのか、そもそも虐待とは何なのか、だからどうだと言うのか、冷静に考えてみると、何もわかっていないことに気付くはずである。

「愛着障害」や「発達障害」というような医療で使われる「診断コトバ」も、その子どもを診断するという目的では、使い勝手が良いのかもしれない。しかし、診断はあくまでも「どの領域に当てはまるのか？」という「分類」とも言え、やはりその言葉だけで子どもの状態像を全て表すことには無理がある。

どのコトバにも共通することが、使い方を間違えてしまうと、個別の話が、そうでなくなってしまう可能性(相対化させられてしまう可能性)があるということである。相対化させることに慣れてしま

うと、想像するきっかけを無くしてしまい、それ以上に理解しようとする能動性を失わせてしまう。

～テメーの都合で使わない～

ハヤリコトバをやけに用いたがる方は、その個々の状況を知ることを放棄しているのだろうか、それとも個々の状況に興味がないだろうか・・・そんな風にしてしまう。

以前、他の機関とやり取りをしているときに、「このケースはジギャクですか？」と聞かれたことがある。自虐？なぜ自分を自分で責める必要があるのかと聞いていたらどうやら、「児童虐待」を略して「児虐」と言っているのだと遅れて気付いた。

とはいっても、まず「児童虐待」だからどうだと言うのかという疑問が思い浮かんだが、それ以上に、そもそも自分たちの都合で略したコトバ（それもその言葉は相手にとって共通語ではない）を他機関に対して使っているという想像力の働かなさに、なんとなくがっかりした。言葉を選ぶときには、自分の都合ではなく、その言葉が相手にどう伝わるかという相手の都合を考えなければいけない。しかし、ハヤリコトバをやたらと使う人が、専門家と呼ばれる人たちに多いのも事実である。私は、その都度、「テメーの都合で使わないよ」と思いながら聞いている。

と言いながら、私がそうした言葉を使わないのかと言われると、そうではない。

例えば、「虐待」という言葉は、被援助者に対しては使わないが、前述の通り、行政機関に対して効果的なこともあるのは事実であり、また、被援助者に告知する場面（対立する覚悟のとき）には、「あなたの行為は虐待です！」と言うことで、自身の行為を振り返り、その行為が適切ではなかったと直面化してもらいやすいこともあるかもしれない。

しかし、そんなことは稀で、「テメーの都合で使わないよ」と思われることの方が多く、「虐待と判断されてしまうこと」＝「悪」と思われる傾向が強いため、たったその2文字に全てを否定されたと感じさせてしまう可能性を秘めているとおく方が良い。

そのため、私は、「虐待」という言葉は用いず、「子どものことで心配なこと」「子どもの成長にとって適切ではない関わり」などと言い直して使用する。また、一般的に虐待（例えば、子どもを叩いてしまう等）と呼ばれる行為をした家族に接する際も、その用いた行為（＝叩くということ）については別の方法に置き換えてもらうように働きかけるが、その行為に至った経緯や感情などは丁寧に聞くようにしている。罪を憎んで、人を憎まずとでも言うのであろうか。全てのプロセスを「虐待」という言葉で相対化して相手にぶつけてしまうことの弊害は大きい。

「この子は虐待を受けて育ってきまし

た」と言われたとして、その情報で一体何が伝わるのだろう。私がそのように言われたとしたら、「どんな虐待を受けてきたのですか？具体的に教えてください。」などと質問を返すと思う。

「〇〇はヤングケアラーですから・・・」と言われたら、「どういったご家族の関係なのか詳しく教えてください」などと質問する。

言葉については、自分の都合で使わないことが一番である。また、ハヤリコトバには、慣れてしまわないことである。そのような言葉のキャッチボールが出来ると、その言葉の奥にある情報を引き出すことに繋がり、個人としての理解が深まると考える。